万葉からみた湖東

近江の万葉集の地理的分布を見ますと、大津京跡を中心とする一群、湖西線に沿う、比良・高島の一群、筑摩・能登瀬・伊香の一群と、今回このシリーズにとりあげる蒲生・野洲・栗太・甲賀にわたる湖東方面の一群があげられるのではないでしょうか。今回とりあげる作品では、何といっても、額田王と大海人皇子の蒲生野での贈答歌をあげねばなりますまい。以下地名をあげて、解説を加えていきましょう。

蒲生野

天皇蒲生野に遊猟したまふ時
額田王の作る歌

● あかねさす紫野ゆき標野ゆき野守は見ずや君が袖振る　巻1　20

皇太子の答へまししし御歌

● 紫草のにほへる妹を憎くあらば人妻ゆゑにわれ恋ひめやも　巻1　21

紀に曰はく天皇7年丁卯夏5月5日蒲生野に縦猟したまふ。時に太皇弟諸王内臣と群臣悉皆に従ひきといへり。

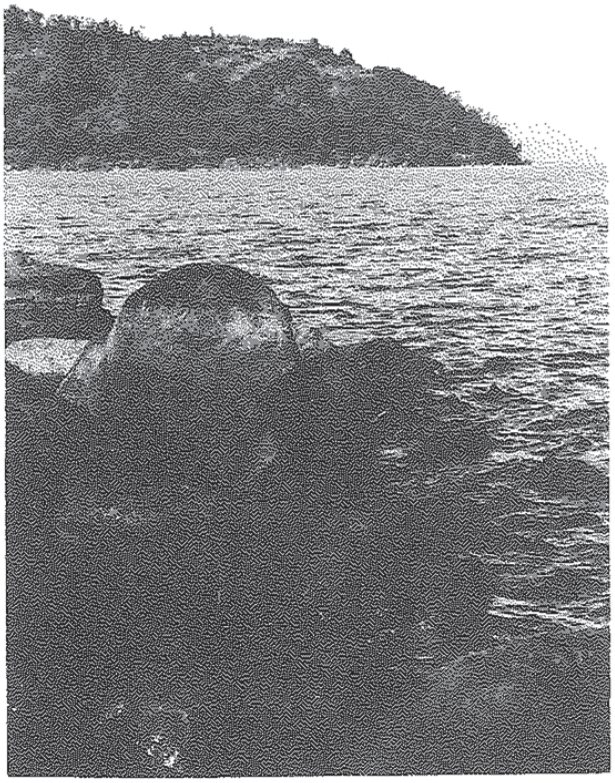
近江鉄道市辺駅の北西に阿賀神社のお旅所があり、その裏山を船岡山といいます。その山頂に元暦校本の文字を拡大した歌碑が作られてからこの二首の歌をたずねる人は必ずと

船岡山の歌碑　（写真提供　松本蒼平氏）

1983．4．30

財団法人　滋賀県文化財保護協会

いってよい程、この山を訪れてきます。唱和されたこの二首の歌に壬申の乱の遠因をさぐる人も多く古来いろいろな点で問題となった作品です。当時の蒲生野はこの遊猟のあった翌年佐平余自信・佐平鬼室集斯等 700余人を以て開墾されたとありますから、作歌当時は自然の原野でありそこに棲息していた鹿の袋角をとるための猟が行なわれたのです。「紫草」という語句のためにともすれば若菜摘みのような野遊びを想像しがちですが、馬を走らせ、弓矢を射かける純然たる狩猟を考えねばなりません。そうしたあとの宴席での歌であるとの解釈もあります。5月5日といえば現行太陽暦の五月晴れとは違い、太陰暦では五月雨の季節です。そうした悪天候を背景にしてこの一首は鑑賞せねばなりません。当時の関係者の年令について、大海人皇子47才、額田王30才、天智天皇55才との説があります。ですから若者たちのうぶな恋愛関係の歌ではなく、酸いも辛いもかみわけた大人の歌でもあるわけです。そうした背景を想定するとき、



沖　の　島

この唱和された歌にひそむただならぬ雰囲気を次第に感じざるを得なくなります。なお、この二首は巻1、雑歌という分類のもとに採録されています。私たちは直観的に恋の歌ではないかと考えがちですが、万葉集の編者は「相聞」の部立ての中には入れていないことも、こうした考え方の一つのよりどころとなっているようです。

沖つ島

- 淡海の海沖つ島山奥まけてわが思ふ妹が言の繁けく　巻11　2439
- 淡海の海奥つ島山奥まへてわが思ふ妹が言の繁けく　巻11　2728

ほとんど同じ言葉でつづられた2首の歌が、巻も同じ巻第11に採録されています。「沖つ島」又「奥(おき)つ島」とうたわれた島の所在については、二つの説がたてられています。

1．近江八幡市沖島町（琵琶湖にうかぶ沖の島）

2．近江八幡市北津田町（旧蒲生郡島村で奥津島神社・大島神社の所在地）

1の沖島へは、長命寺港から朝夕2便の定期便で渡るか、漁舟をたのんで渡る以外には方法はありません。法難をさけた蓮如上人の遺跡など所在しますが、一方、平安時代以降にこの島に人が定住しだしたという説もあります。しかし和同開珎が出土したり、淡海公藤原不比等が創祀した式内社奥津島神社が存在することなど、万葉歌が残っていてもよいという説もあります。

2の奥津島神社をたずねますとかつてこの神社と隣りあっていた、旧、島村の役場あとの金庫がいまだに残されています。今は「渡会橋」によって陸続きの感じがしますが、もとは島村の名の示すが如く、琵琶湖にうかぶ島でした。大島奥津島文書などによると古くこの神社を中心に惣的結合のあった農民達の存在もみとめられ、天智天皇の蒲生野遊猟時以来毎年11月1日に「むべ」を11個宮中に献上する習慣が、福井茂助家に伝わっているこ

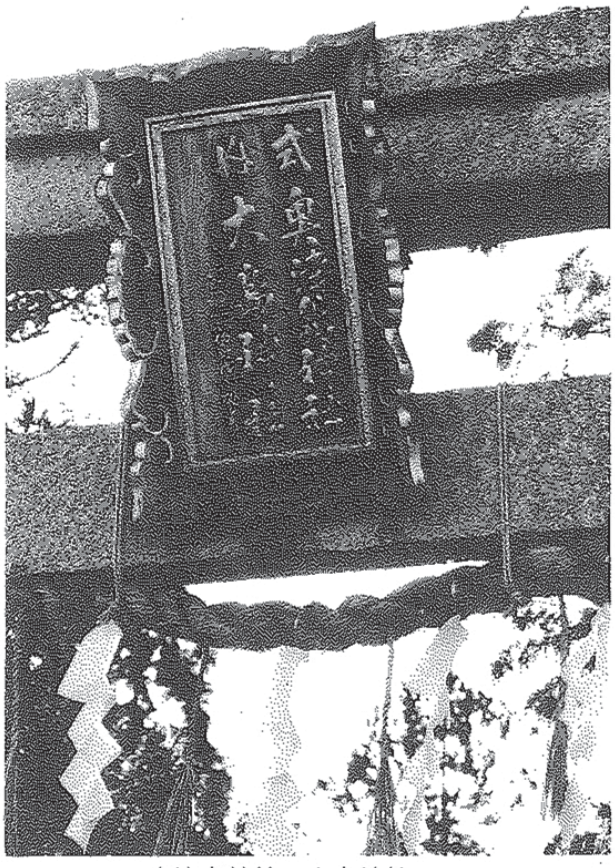
となどこれまたすてがたい根拠が残っています。

さてこの１首を収録する巻第11の特色は伝誦性に富んでいるところにあるといわれます。自分の恋人に何のかのと噂がつきまつわっていることを嘆く作品ですが、歌劇の１部を短歌としているような味わいが感じられませんか。

水茎岡

近江八幡市牧の湖岸は風景絶佳、近ごろテレビの時代劇はここで撮影することが多く、地名や時代はどのように変ろうとも背景に出てくるのは牧の水泳場附近の景色が多いようです。その牧の浜に沿って湖岸道路が建設され未完成のまま水茎岡の二つの頂の鞍部を越しています。「水茎」の地名をもっている作品を万葉集から抜き出すと四首を数えます。

- 天霧らひ日方吹くらし水茎の岡の水門に波立ちわたる　巻７　1231
- 秋風の日にけに吹けば水茎の岡の木の葉も色づきにけり　巻10　2193
- 雁がねの寒く鳴きしゆ水茎の岡の葛葉は色づきにけり　巻10　2208
- 水茎の岡の葛葉を吹きかへし面知る子等が見えぬ頃かも　巻12　3068



奥津島神社・大島神社

このうち1231の歌については、岩波書店版「古典文学大系」の頭註の如く福岡県説も多いのですが、2208や3068の歌は現地をたずねてみて近江の地名とした方がふさわしいのではという思いを深くしました。水茎岡の西の小丘をのぼりますと、古墳時代後期の特色である群集古墳が破壊され累々とその断面を見せています。古墳の所在地は、この小丘全域に及んでいるものと思われます。頂上の平坦部は足利義澄を奉じた九里氏が築いた城のあとと称せられ明らかに削平されていて、土師器・須恵器の土器片が露出しているのを拾い

水　茎　岡

集めることが出来ました。それを併せ考えてみますと、古墳築造後の植生として、まず葛がはびこることが考えられるのではないかと思ったからです。できたての古墳は表面を礫でおおわれた石山で、そこへ自然に生え出すのは萱や葛のたぐいではないかと考えられるからです。古墳の存在は近くに村落の存在が考えられ、3068の作品の如き作品をうみ出したのではないでしょうか。

古今集巻第20の大歌所御歌には「近江ぶり」と並んで「みづくきぶり」があり、そこに採録されている一首の制作年代は恐らく読人しらずの時代の作品と考えられます。とすると相当古い地名ということができるのではないでしょうか。

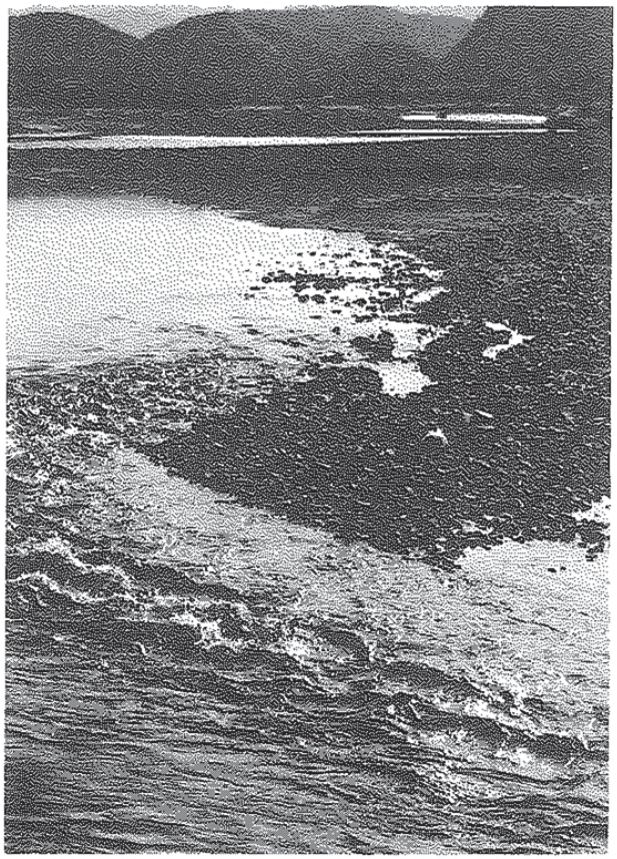
野洲川

- 吾妹子にまたも近江の野洲の川安眠(やすい)も寝ずに恋ひ渡るかも　巻12　3157

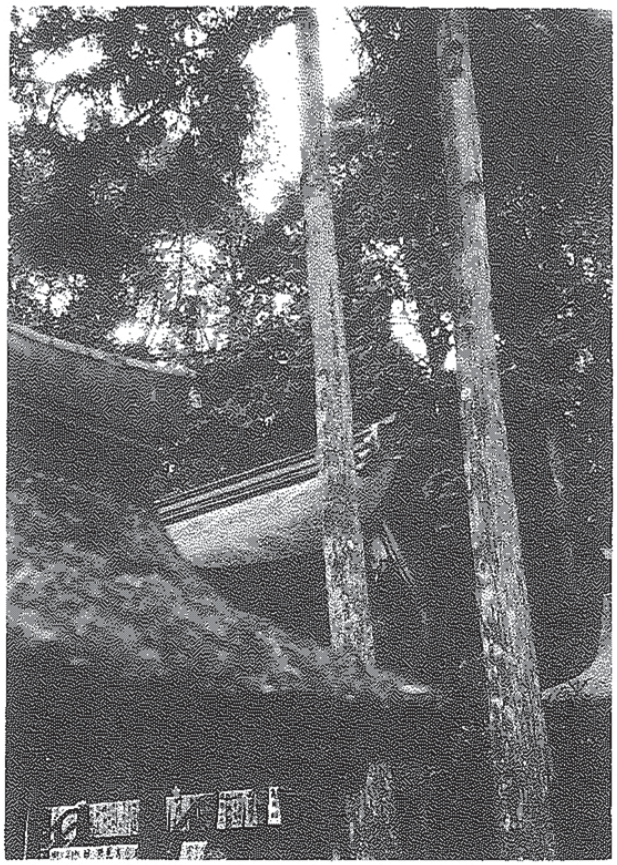
「羇旅発思(たびにおもいをおこす)」というタイトルのもとに集められているこの一首、律令制のもとで人々は、旅費自弁で駆使される機会が多かったのですがこの歌の作者もそうした名もなき民の一人かも知れません。上三句は「安眠(やすい)」の「やす」という音を呼びおこすための序詞(じょことば)となっています。この一首のリズムは沈鬱なものではなく何か明るいひびきをもっているようです。そういうひびきあいからも、私は妻と離れてゆくという場合よりも、あと数日すれば再び出会える機会をもつ一人の旅人を想定してみたいのです。2・3年前新しく開通された新野洲川の河床となる守山市服部の遺跡を見に行きました。弥生式の土器が、くろい粘土層の上にその丸底をのせていたのが印象的でした。出土品の量と質から郡衙がここにあったといわれました。国府と郡衙の間は公道によって結ばれていました。東山道もそれを兼ねていたかもしれません。そうすればこの一首の作者もそのあたりで野洲川を越えた経験を持っていたのではないでしょうか。

石　部

- 白真弓石辺の山の常磐(ときは)なる命なれやも恋ひつつをらむ　巻11　2444



野　洲　川



吉姫神社

石辺の山をたずねて、石部の町に入り初詣の客もまばらな、石部鹿塩神社に入ったのは1月2日の昼近い刻でした。御祭神は富士山と同じ木花咲耶姫であるとのこと。石部の名はその姉妹神磐長姫の方がふさわしいのではとの思いを深くしました。聞けば神社の裏山を開発したとき古墳が発見されその蓋石がそれですと社務所の向う側の巨石を指さされました。恋や愛は、今も昔も両性の永遠の誓いのもとに完成するもの、そうした誓いを、石部の山にかけて誓いあったのですから、私が吉姫神社をたずねたのも、そう見当ちがいではなかったろうと思います。なおこの歌を本歌として、右大臣実朝は、

- しら真弓いそべの山の松の色の常盤にものを思ふ頃かな　　新勅選集　巻13

の一首をものしていますが、私は万葉集の作品の方に生命感が躍動するのをおぼえます。

矢　橋

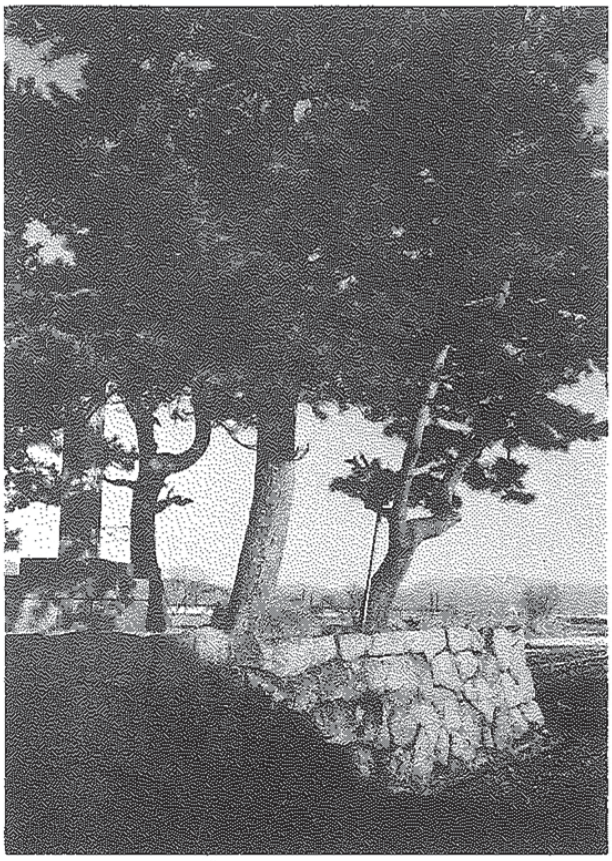
江戸時代までは、大津市打出浜から、ここ矢橋まで渡し舟がしきりに往来していました。現地をたずねると立派な常夜燈が残っており「渡航安全」の文字が大きく刻みこまれていました。

- 淡海のや矢橋の小竹を矢着かずてまことあり得めや恋しきものを　　巻7　1350

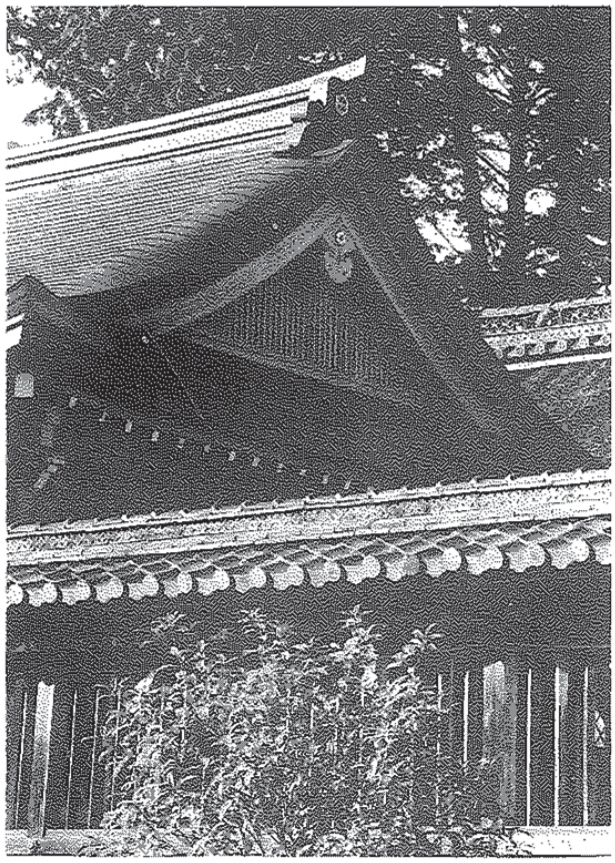
この一首は、土地の若者に唱和された相聞の歌です。鎌倉時代の天台座主慈鎮の歌に

- 近江路や路路の篠原夕行けば志賀よりかへる笹波の風

と「漣」と「笹の波」とをかけた表現をしているところからもこのあたり一帯は笹原であったことがわかります。矢の材料とする竹の生産地であったことから「矢橋」の地名ができたのかも知れません。ところで矢の竹を作るには、刈りとり乾燥をしまっすぐにする矯正の作業など比較的長い日時が必要となるのではないでしょうか。そうしてみると小竹を矢とするという長い時日を要しても、お前を妻とせずにはおかぬという決意をうたいあげた一首で、土俗の匂いがふんぷんと匂いたった作品です。純粋な愛のかたちが土地の特性を



矢　　橋



大宝神社

通して詠みあげられているともいえましょう。

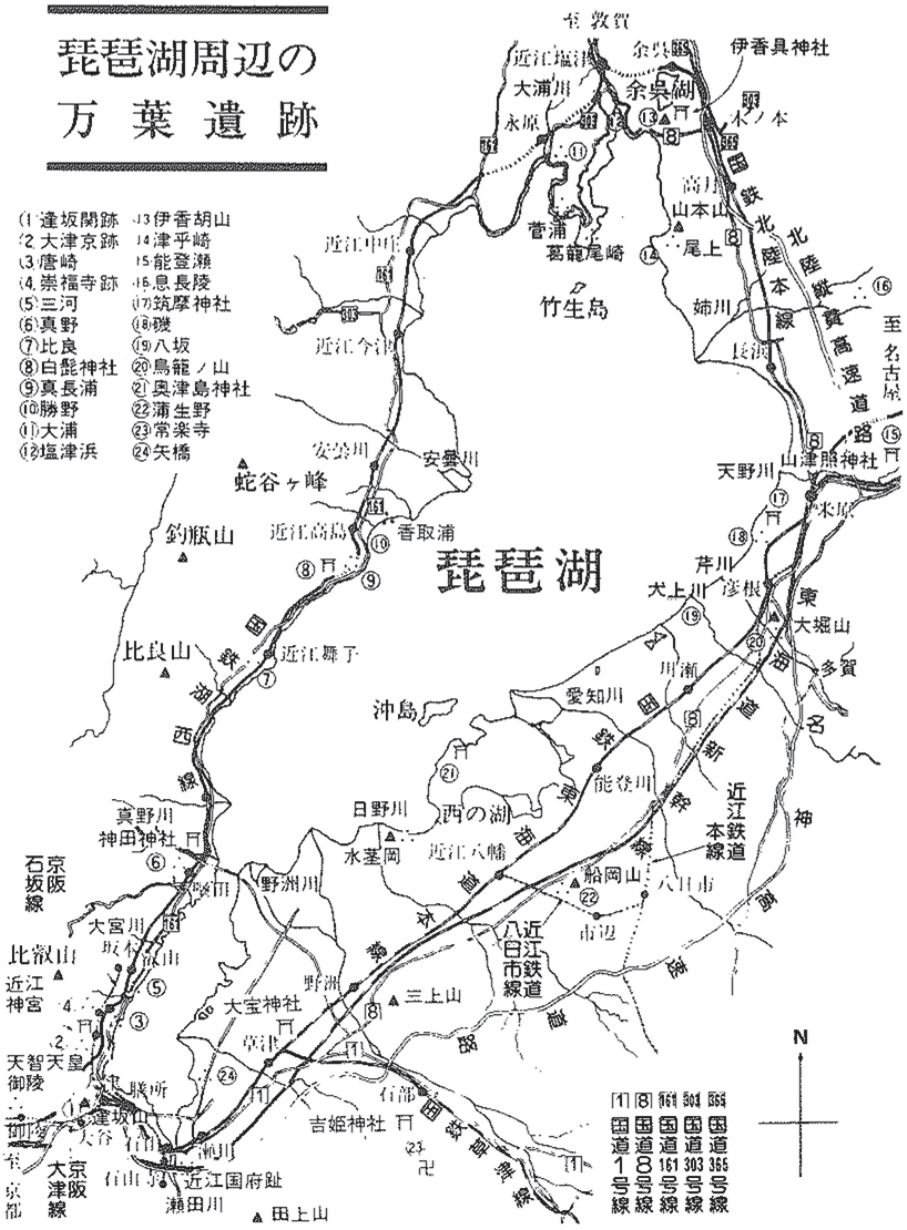
綣

- 綜麻形の林のさきの狭野榛の衣に着くなす目につくわが背　　巻1　19

この1首の綜麻形について「代匠記」以降地名説があったのですが、山田孝雄「万葉集講義」に栗東町綣が提起されてから、にわかにこの説がクローズアップされてきました。私も旧い朝鮮人街道が町並を貫いている綣を40年ぶりにたずねてこの一首を回想してみました。大宝年間に創始された大宝神社の森には二抱えもある楠の御神木をはじめとした樹木が天をおおっていました。すぐ傍を通る東海道本線の電車のひびきをも感じさせないふかさをもっていました。

この一首は近江遷都の時の額田王の三輪山の歌に和ふる歌となっていますが、左註には「今かんがふるに和ふる歌に似ず」と記されていて、古くから遷都の時の作品ではないとの疑いがありました。だが「榛」の木が赤に近い鮮かな色を染め出す染剤として用いられることを知ってからは、作者井戸王（歴史的にはこの人の事蹟は全くわかりませんが、私は額田王と同じく女性ではないかと思います）が、遷都には消極的と考えられる額田王の作品に対して、積極的に朱衣を着ておられる男性を賛美する形式をとって、大津遷都への賛成を寓している作品ではないかと考えたくなったのです。綣は当時の近江国庁、瀬田とも近く、大和から近江に入った行幸の列が、新京に入る前に、栗太郡に入ったと考えますと、この作品は地理的にもそう無理がなく、栗東町綣での作品としてみてもよいのではないでしょうか。

（山村金三郎氏提供）



交　通

蒲生野　近江鉄道八日市線　市辺下車

沖つ島　近江バス　宮ヶ浜行　北津田下車、長命寺下車　舟便

水茎岡　近江バス　野ヶ崎行　牧下車

野洲川　国鉄野洲駅

石　部　国鉄石部駅

矢　橋　近江バス　矢橋下車

綣　近江バス　大宝神社前